



三峰川のオオキンケイギクの生息範囲と防除

伊那北高校 理数科 課題研究 生物1班

研究者 林優衣 西村拓海 小松友大 宮澤遥 江川晴菜

指導教員 大石英一 倉石典広 小山由美子 深堀奈苗

背景

- ・外来種による在来種への影響
→在来生物の生態を脅かす.
- ・三峰川には特定外来生物である本種が繁茂
→本種の生態を調べて防除につなげる.

調査方法

- ①目視, 聞き取り調査による分布調査
→地図にまとめ, 分布範囲を調べる.
- ②コドラート法を用いた生息範囲の調査
→1m × 1mの枠を等間隔に並べて個体数を調べる.
- ③根の広がり方の調査
→掘削調査による地中の根の観察.

調査結果

調査①(目視による分布調査)

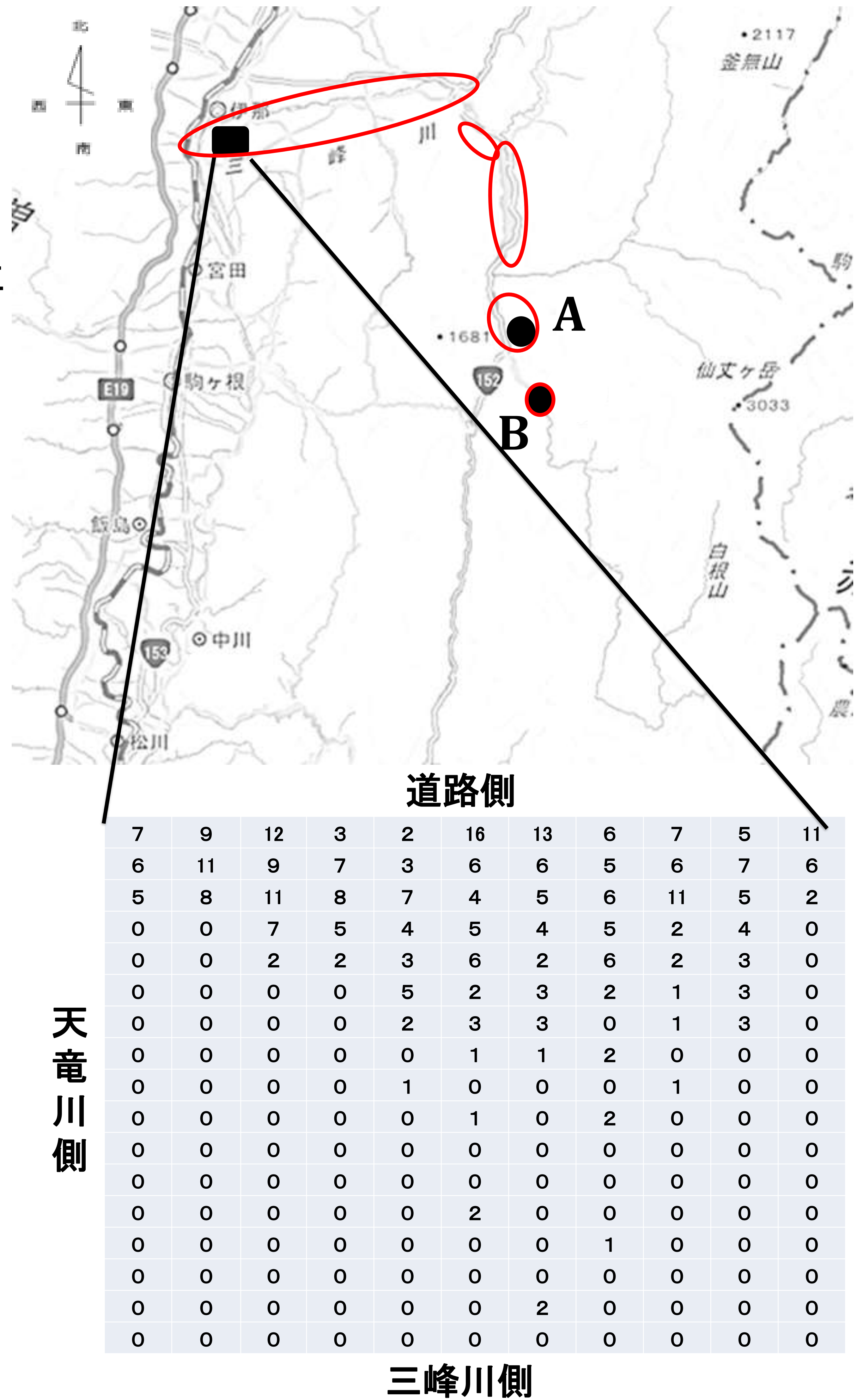
- ・天竜川合流点から地点Bまでの河原や堤防, 道路沿いでよく見られた. (右地図の赤く囲んだ範囲は, 目視で本種の生息が確認できた場所, 聞き取り調査で生息しているという情報があった場所, 資料提供で得た分布状況を表す)
- ・堤防では草丈が低い植物が生息している斜面だけでなく, 人工的に作られた斜面にも多く見られた.
- ・本種が見られるところには草丈が低い植物が見られることが多い.
- ・地点A(標高861m)で本種が見られたのを最後にそこから上流では目視で確認出来なかった.
- ・聞き取り調査で, 地点B(標高871m)から上流では本種が見られなかったという情報を得た.

調査②(コドラート法を用いた生息範囲の調査)

- ・三峰川から離れた場所のほうが河川近くに比べて本種が多く生息していた.
(右表のひとマスは方形区[1m × 1m]を表す)

調査③(根の広がり方の調査)

- ・伊那市役所周辺
 - ・2個体間での根の繋がりが確認できた.
 - ・全体的に個体数が多い.
 - ・集中的に分布.
- ・三峰川橋上流
 - ・2個体間での根の繋がりは確認できなかった.
 - ・全体的に個体数が少ない.
 - ・ツタ植物が多く分布し, 地中にも多くの根が残されていた.



考察

- ・地点A, 地点Bより標高約900m以上は本種が生息しにくいと考えられる.
→本種は強い寒さへの耐性力が低いということが考えられる.
- ・本種が見られなかった場所では, 人によって刈りとられていたり, 川のすぐ西側に山があり日光が当たりにくい環境になっていたため生息していなかったと考えられる.
- ・他の植物にとっては過酷な環境である河原は本種にとって繁茂しやすい.
- ・法面緑化の為に道路側で植えられたことがある可能性があるため, 今も道路側で多く分布していると考えられる.
- ・本種がツタ植物の多い三峰川橋上流で根が繋がらずに分布.
→ツタ植物によって本種が根を張るための十分な場所がなかったため繋がらなかったと考えられる.
- ・伊那市役所周辺では根を張るための十分な場所があったため, 根が繋がったと考えられる.

結論

- ・本種の駆除の際は, 日当たりの良い乾燥した河原や道路沿いを中心に調べる必要がある.
- ・低い温度への耐久力がないと考えられ, 標高の高い地域で繁殖が進行するとは考えにくいいため, 山間部よりも平地の河原を中心に駆除するのが適当である.
- ・根の繋がりが繁茂に大きくかかわっていると考えられるため, 上部のみの駆除ではなく根まで駆除する必要がある.
- ・冬期はロゼッタとなり他の植物との識別が付きにくくなるため, 特徴的な黄色の花弁が確認できる5月から7月に駆除するのが適当である.